麦野Ｃ遺跡９

―麦野Ｃ遺跡第16次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1376集

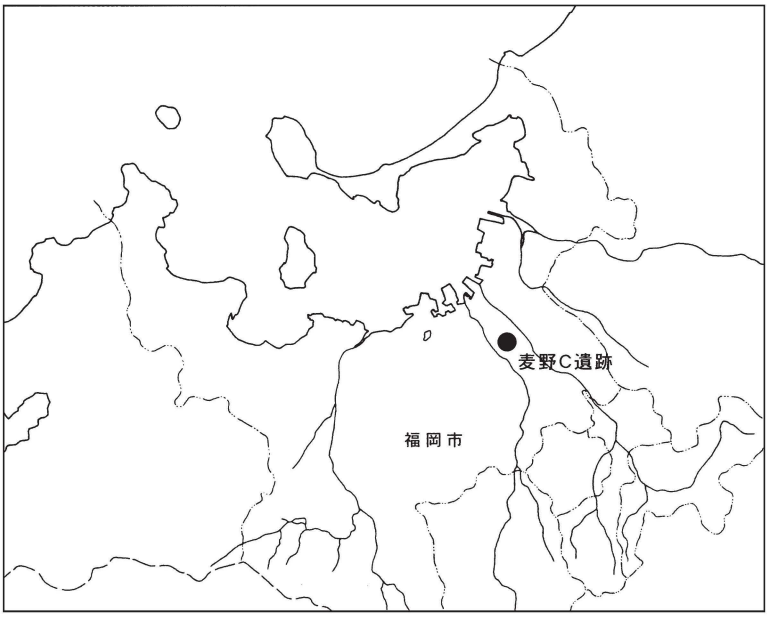
２０１９

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1376集

麦野Ｃ遺跡９

― 麦野Ｃ遺跡第16次調査の報告 ―



遺跡略号　MGC−16
調査番号　1627

２０１９

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。そのため市内には、数多くの歴史的な遺産が存在します。しかし、近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築にともなう麦野C遺跡第16次調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代の住居跡のほか、中世の遺構や遺物なども検出しています。これらは麦野C遺跡における各時期の集落跡の形成や広がりを知る上での手がかりとなるとともに、地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、優仁株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は優仁株式会社が実施した博多区麦野6丁目14−1地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成28年度に実施した麦野C遺跡第16次調査の調査報告書である。
2．本書で用いる方位はすべて座標北である。
3．検出した遺構については、調査時の検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号に遺構の性格を示す用語を付して記述する。遺構の呼称は住居をSC、土坑をSK、ピットをSPと略号化している。
4．本書で使用した遺構実測図は松﨑友理が作成した。
5．本書で使用した遺物実測図は松﨑、平川啓治が作成した。
6．製図は松﨑による。
7．本書で使用した遺構および遺物写真は松﨑が撮影した。
8．本書の執筆･編集は松﨑が行った。
9．本書に関わる記録類･遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵･管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査組織 …… 1
Ⅱ．立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．調査の概要 …… 5
　2．遺構と遺物 …… 6
　　（1）住居 …… 6
　　（2）土坑 …… 11
　　（3）落ち …… 13
　　（4）ピット …… 14
Ⅳ．おわりに …… 14

挿　図　目　次

Fig.1　麦野C遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 3
Fig.2　麦野C遺跡調査地点位置図(1/4,000) …… 4
Fig.3　第16次調査区位置図(1/500) …… 6
Fig.4　第16次調査区遺構配置図（1/200） …… 7
Fig.5　第16次調査区南西壁土層断面図（1/80） …… 7
Fig.6　SC018実測図(1/60)および出土遺物実測図（1/3,5･6＝1/2） …… 8
Fig.7　SC025実測図(1/60)および出土遺物実測図（1/3,15~18＝1/2） …… 9
Fig.8　SC032実測図(1/60) …… 10
Fig.9　SK031実測図(1/30) および出土遺物実測図（1/3,23＝1/2） …… 11
Fig.10　SK007・SK030実測図(1/30) および出土遺物実測図（1/3） …… 12
Fig.11　落ち土層断面図(1/40)および出土遺物実測図（1/3） …… 13
Fig.12　SP出土遺物実測図（1/3） …… 14

表　目　次

Tab.1　麦野C遺跡発掘調査一覧表 …… 5

図　版　目　次

PL.1　（1）調査区全景（東から）
　　（2）SC018（南西から）
　　（3）SC025（北から）
　　（4）SC032（東から）
　　（5）SK031（北から）
PL.2　出土遺物

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、優仁株式会社より申請された福岡市博多区麦野６丁目14－１における共同住宅建設にともなう埋蔵文化財の有無についての照会を平成28年５月12日付で受理した。申請面積は1412.05㎡、受付番号は28－２－98である。

申請地は麦野C遺跡の包蔵地中央部に位置していることから、埋蔵文化財課事前審査係は試掘調査を実施し、地表面下約15cmで遺構が検出された。この成果をもとに協議を行い、工事によってやむを得ず破壊される419.09㎡を対象に、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は優仁株式会社と福岡市との間で委託契約が締結され、平成28年９月20日に着手、平成28年11月２日に終了した。資料整理および報告書作成については平成30年度に行うこととなった。

２．調査組織

調査委託　優仁株式会社

調査主体　福岡市教育委員会

（発掘調査：平成28年度　整理報告：平成30年度）

調査総括	文化財部埋蔵文化財課	課長	常松　幹雄（28年度）
	文化財活用部埋蔵文化財課	課長	大庭　康時（30年度）
		調査第１係長	吉武　　学
庶務	埋蔵文化財課	管理係長	大塚　紀宜（28年度）
		管理係	入江 よう子（28年度）
	文化財活用課	管理調整係	松尾　智仁（30年度）
事前審査	埋蔵文化財課	事前審査係長	佐藤　一郎（28年度）
			本田 浩二郎（30年度）
		主任文化財主事	池田　祐司（28年度）
			田上 勇一郎（30年度）
		文化財主事	清金　良太（28年度）
		文化財主事	朝岡　俊也（30年度）
発掘調査	埋蔵文化財課調査第１係	文化財主事	松﨑　友理

発掘作業　宮崎　正　吉田哲夫　柴田秀人　松下さゆり　木田憲作　久保和美
山本 加奈子　渡辺清嗣　吉岡田鶴子　木田ひろ子　西田文子　山本千加子

整理作業　大石 加代子

遺跡名	麦野C遺跡	調査次数	第16次	遺跡略号	MGC-16
調査番号	1627	分布地図図幅名	麦野 12	遺跡登録番号	0050
申請地面積	1412.05㎡	調査対象面積	419.09㎡	調査面積	361㎡
調査地	福岡市博多区麦野６丁目14－1			事前審査番号	28-2-98
調査期間	平成28(2016)年９月20日～11月２日				

Ⅱ．立地と歴史的環境

麦野Ｃ遺跡は、福岡市の最南端に位置し、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川の間にある春日丘陵の東辺に並行して延びる丘陵上に立地する。春日丘陵には奴国王墓とされる須玖岡本遺跡や、青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡などが展開しており、麦野C遺跡の立地する丘陵はこの春日丘陵から北東へ１kmの距離にある。丘陵は鳥栖ローム層を基盤とし、諸岡川などの開析により谷が幾筋にも嵌入して、八つ手状に低丘陵を形成している。この低丘陵上に点在する遺跡は地形的に区分され、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡と呼ばれている。

この丘陵上で出土した最も古い遺物は、旧石器時代の石刃や剝片などである。麦野A遺跡第１次、麦野B遺跡第３次、雑餉隈遺跡第５・10次の調査区で出土しており、丘陵の広い範囲にわたって拡がっていることが明らかになりつつある。縄文時代の遺構は希薄で、麦野B遺跡や南八幡遺跡などで「落とし穴」と考えられる土坑が検出されているものの、出土遺物が少なく、時期は明確になっていない。

弥生時代に入ると、遺構は次第に拡がりをみせる。雑餉隈遺跡第５次調査区では前期の円形住居跡と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、前期の段階で大規模な中心的集落が営まれていた可能性がある。また、麦野A遺跡第18～20次調査区や麦野C遺跡第12次調査区でも貯蔵穴群が検出されており、丘陵の北部域にも拡がりが認められる。麦野C遺跡第５次調査区では弥生時代前期末の住居跡や、弥生時代中期末～後期初頭にかけての方形住居群が検出されている。雑餉隈遺跡第５次調査区や南八幡遺跡第５次調査区では後期の方形住居跡が検出されているものの、後期の遺構はやや稀薄である。しかし、南八幡遺跡第９次調査区ではガラス小玉をともなう住居跡や掘立柱建物跡、第19次調査区では連鋳式の銅鏃鋳型が住居跡から検出され、雑餉隈丘陵では南縁から西縁に沿った３つの小丘陵で比較的小規模な工房をともなう集落域が営まれたものと推測される。一方、墳墓に関しては麦野C遺跡第５次調査区で小児甕棺墓１基が検出されているものの、集落域にともなう墳墓群は明確になっていない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になり、前期から中期にかけての遺構や遺物はほとんど検出されていない。後期に入ると、南八幡遺跡第２次調査区と第３次調査区では住居跡が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測される。しかし、奈良時代に形成される大規模な集落跡との関連については不明確である。

奈良時代に入ると、丘陵に掘立柱建物群をともなう大規模な集落域が出現する。雑餉隈遺跡第９次調査区で方形に配置された大型の建物跡が検出されており、７世紀末から８世紀始めの時期と考えられる。建物の規模と配置から官衙的な様相がうかがえる。集落域が丘陵の全域にわたって展開するのは８世紀前半から後半の時期と推定される。南端の雑餉隈遺跡では第５次調査区で50棟を越す住居跡が検出されている。また、東側の麦野C遺跡では第１・５・13次調査区で合わせて70棟を越す住居跡が検出されている。住居にはカマドを有するものが多く、住居は数回にわたって建て替えがなされ、長期的に集落が展開していたことが推定される。西側の南八幡遺跡においても台地の南縁に位置する調査区を中心に集落域が展開しており、舌状に分かれた小丘陵ごとに多少の規模の差異はあるものの、集落域が展開している状況がうかがえる。その中でも特に雑餉隈遺跡と麦野C遺跡に関しては検出された住居跡が多く、規模が大きいことから、丘陸における拠点的な集落であった可能性が考えられる。

平安時代の初めには、集落域が急速に縮小する。麦野A遺跡の第３次調査区と麦野C遺跡第15次調査区では井戸や土坑が検出されている。柱穴から遺物が散見され、掘立柱建物の存在が想定される。

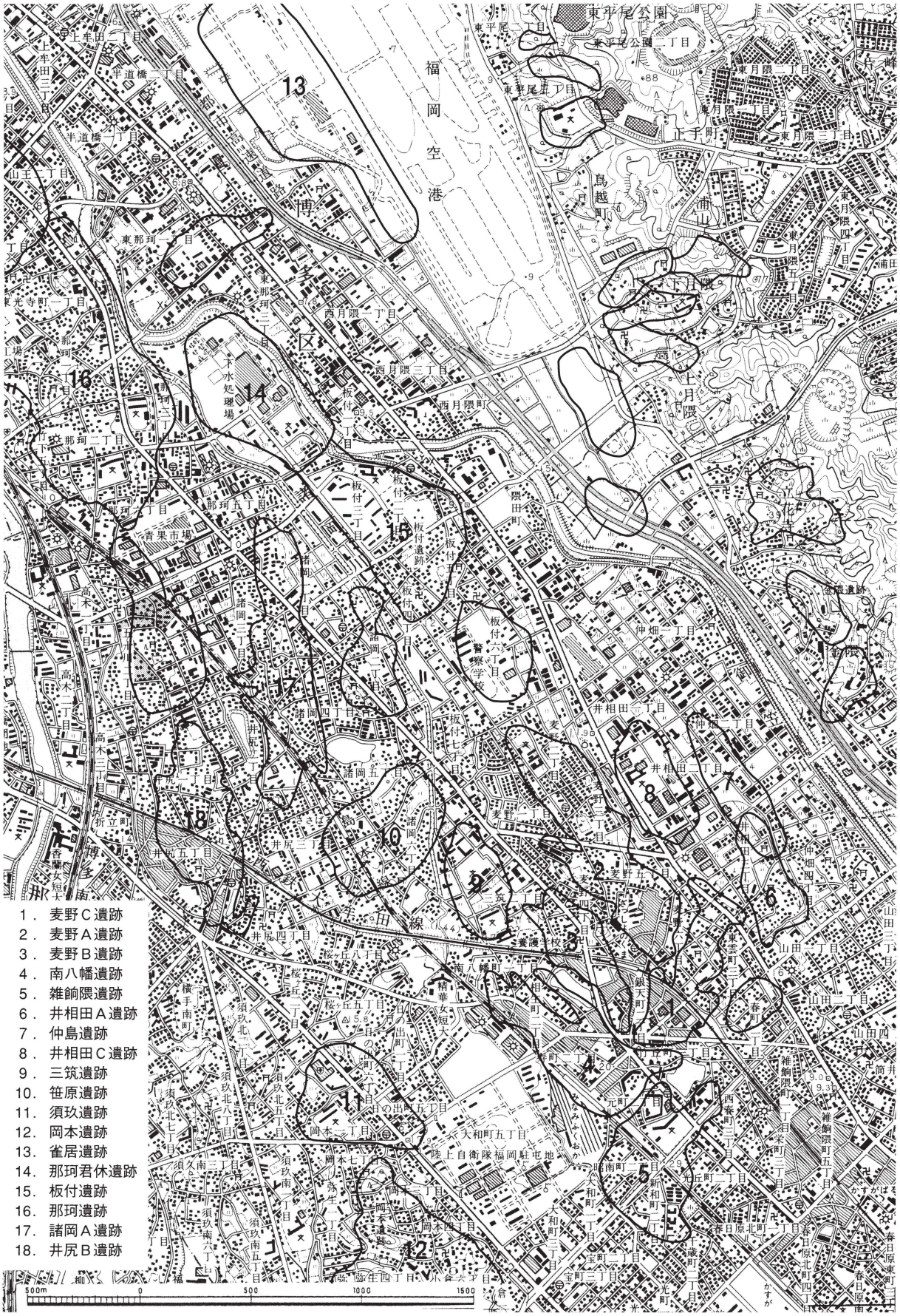


Fig.1　麦野C遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000)

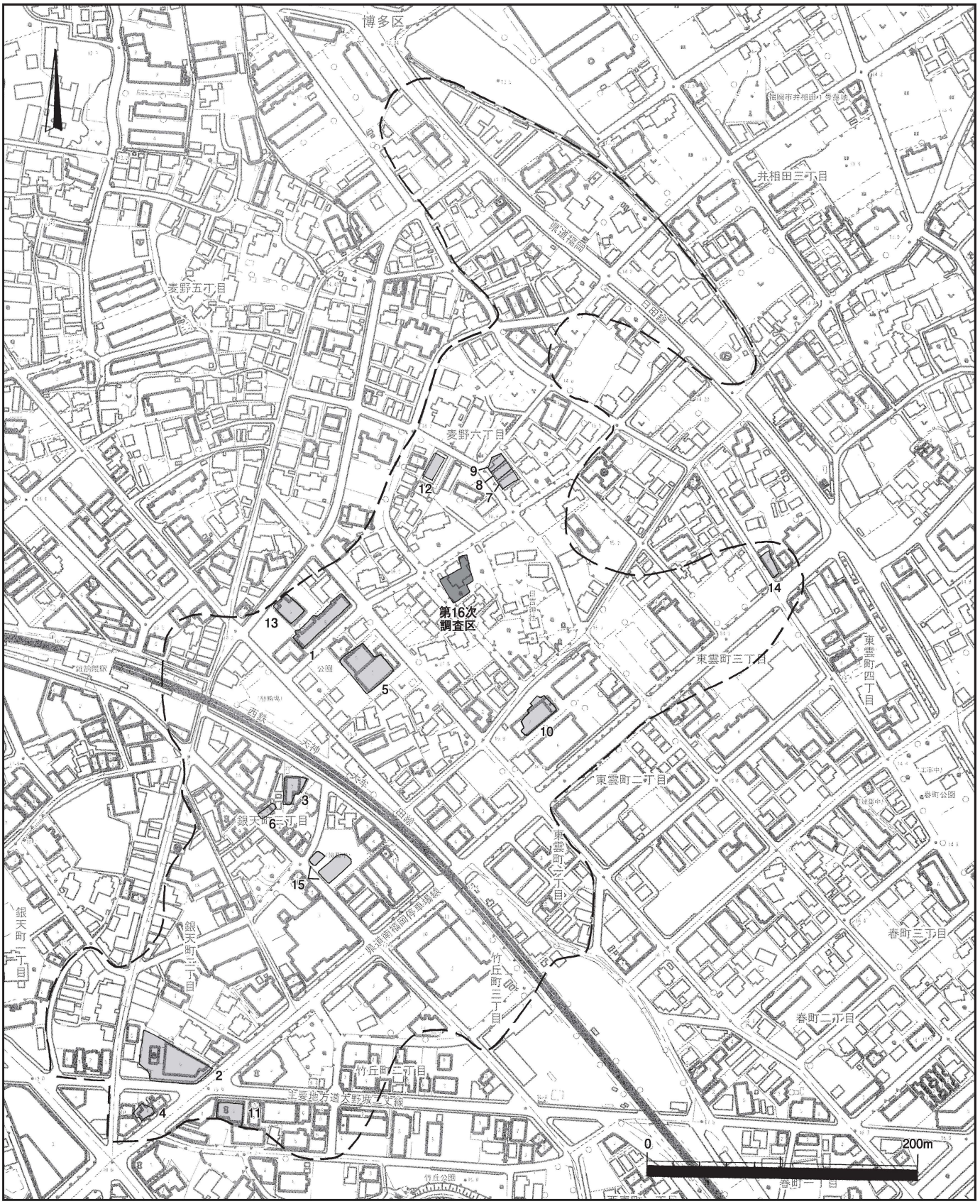


Fig. 2　麦野C遺跡調査地点位置図(1/4,000)

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

麦野遺跡は御笠川の西岸を南北にのびる雑餉隈の丘陵上に立地する。この丘陵は諸岡川などの開析による谷が嵌入して、いくつかの低丘陵を形成している。麦野C遺跡は南北800m、東西400mの範囲に分布し、本調査地は麦野C遺跡の中央に位置する。過去の開発により地下げされた周辺に比べて標高が１mほど高く、現地表面の標高は18m前後を測る。

発掘調査は平成28年９月20日に着手した。20・21日に重機による表土剥ぎを行った後、遺構検出を開始した。遺構掘削や図化、写真撮影などの作業を進め、遺構の掘削がほぼ終了した10月25日に全景写真を撮影した。土器の洗浄作業などを行った後、11月２日に重機による埋め戻しと機材等の搬出を行い、調査を終了した。

遺構は表土から５～25cm下の鳥栖ローム層上面で検出した。調査区内は中央から北側にかけて既存建物の基礎等で大きく撹乱され、調査区東端では地形の急な落ちが確認された。遺構は調査区西側に集中し、竪穴住居跡３軒、土坑３基、ピットなどが検出された。住居跡はいずれも調査区外に拡がっているため、全体の大きさは把握できていないが、平面プランはすべて方形を呈している。そのうち調査区南東端にある住居跡では壁溝が２条見つかり、土の堆積状況から建て替えを行い、規模を拡張したことが確認された。床面で鉄製鎌が１点出土しており、出土土器から弥生時代後期前半と推定される。調査区西端の住居跡では、北側に10cmほど高く貼床が検出され、ベッドの可能性がある。時期は弥生時代後期後半～終末と考えられる。この住居跡に切られる土坑では弥生時代後期後半の器台や壺がまとまって出土した。また、調査区西側では古代末～中世前半の時期の土坑が２基検出されており、白磁の皿や椀、石鍋などが出土している。遺物は弥生土器を中心に、輸入陶磁器、須恵器、石製品、鉄製品など、コンテナケース４箱分が出土した。

Tab.1　麦野C遺跡発掘調査一覧表

次数	調査番号	所 在 地	調査面積(㎡)	報告書	主な時期	遺構の概要	主な出土遺物
1	8949	麦野6-11-4	633	361	古代 (8C中～後半)	奈良：住居跡、土坑	旧石器の石刃、扁平片刃石斧
2	8904	銀天町2-4	100	年報VOL.4	古代 (7～8C)	奈良：住居跡	
3	9604	銀天町3-14	242	501	古代	奈良：住居跡、土坑、溝	
4	9628	銀天町2-3-6	265	867	古代	奈良：住居跡	
5	9856	麦野6-12-5他	871	643	弥生前期末、古代	弥生：住居跡、掘立柱建物跡、甕棺墓 奈良：住居跡 中世：土壙墓	石庖丁、蛤刃石斧、袋状鉄斧、紡錘車
6	0140	銀天町13-2他	32	年報VOL.16	古代	柱穴	
7	0304	麦野6-18-1	115	867	古代	奈良：住居跡、掘立柱建物、土坑、落とし穴	
8	0305	麦野6-18-15	121	867	古代	奈良：住居跡、土坑 近世：井戸	
9	0306	麦野6-18-16	41	867	古代	奈良：住居跡、土坑、溝	
10	0509	東雲町2-1-1	677	897	古代、中世後半	奈良：住居跡 室町：溝	
11	0731	竹丘町1-3-2・13	294	1057	古代	奈良：住居跡、掘立柱建物跡、土坑、土壙墓	鉄斧、平瓦
12	0746	麦野6-15-3	203	970	弥生、中世後半～近世	弥生：貯蔵穴 中世後半～近世：井戸、土坑、溝	
13	0805	麦野6-11-2	318	1101	古代	奈良：住居跡、土坑	鉄斧、紡錘車
14	0835	東雲町4-17-2・18・19	191	年報VOL.23	古代末～中世前半	溝、柱穴	
15	1227	銀天町3-28-2・5・6	451	1244	古代末～近世	井戸、土坑、溝	瓦器碗、須恵器、鉄鎌
16	1627	麦野6-14-1	361	本報告	弥生、中世	弥生：住居跡 中世：土坑	鉄鎌

２．遺構と遺物

（１）住居（SC）

SC018（Fig.6・PL.1－（2））

調査区西端で検出された竪穴住居跡である。西側は撹乱と土坑に削平され、東壁はSK031の西壁を切る。南側が調査区外へと続くため、全体の規模は不明であるが、方形の平面プランを呈し、少なくとも南北長2.2m以上、東西長2.7m以上を測る。壁高は約40cm残存しており、本調査区の中で検出された住居跡の中では最も遺存状況が良い。検出できた北壁と東壁には幅約10～20cm、深さ約５cmの壁溝が巡る。床面には黄褐色粘質土と黒色粘質土で形成した土を５～15cmほど敷き詰めて貼床としている。北側では10cmほど床面が高くなっており、ベッドの可能性が考えられる。なお、主柱穴は未検出である。遺物は弥生土器片を中心にパンケース1.5箱分出土した。出土遺物の年代から、弥生時代後期後半～終末の住居と考えられる。

出土遺物（Fig.6・PL.2）

１～４は弥生土器である。１は壺の底部で、胎土に白色砂粒を少量含み、器面は内外面ともに淡黄橙色を呈する。２は器面に丹塗りの痕跡が認められる。外面にハケメ、内面にナデ調整が残る。３は直口口縁の鉢で底部はやや丸底気味である。口径15.2cm、器高9.9cmを測り、胎土に白色砂粒を多く含む。内外面ともにハケメ調整がみられ、外器面はにぶい黄橙色を呈する。４は甕の口縁部で、復元口径は31.8cmを測る。器面は摩耗しており、調整は不明である。

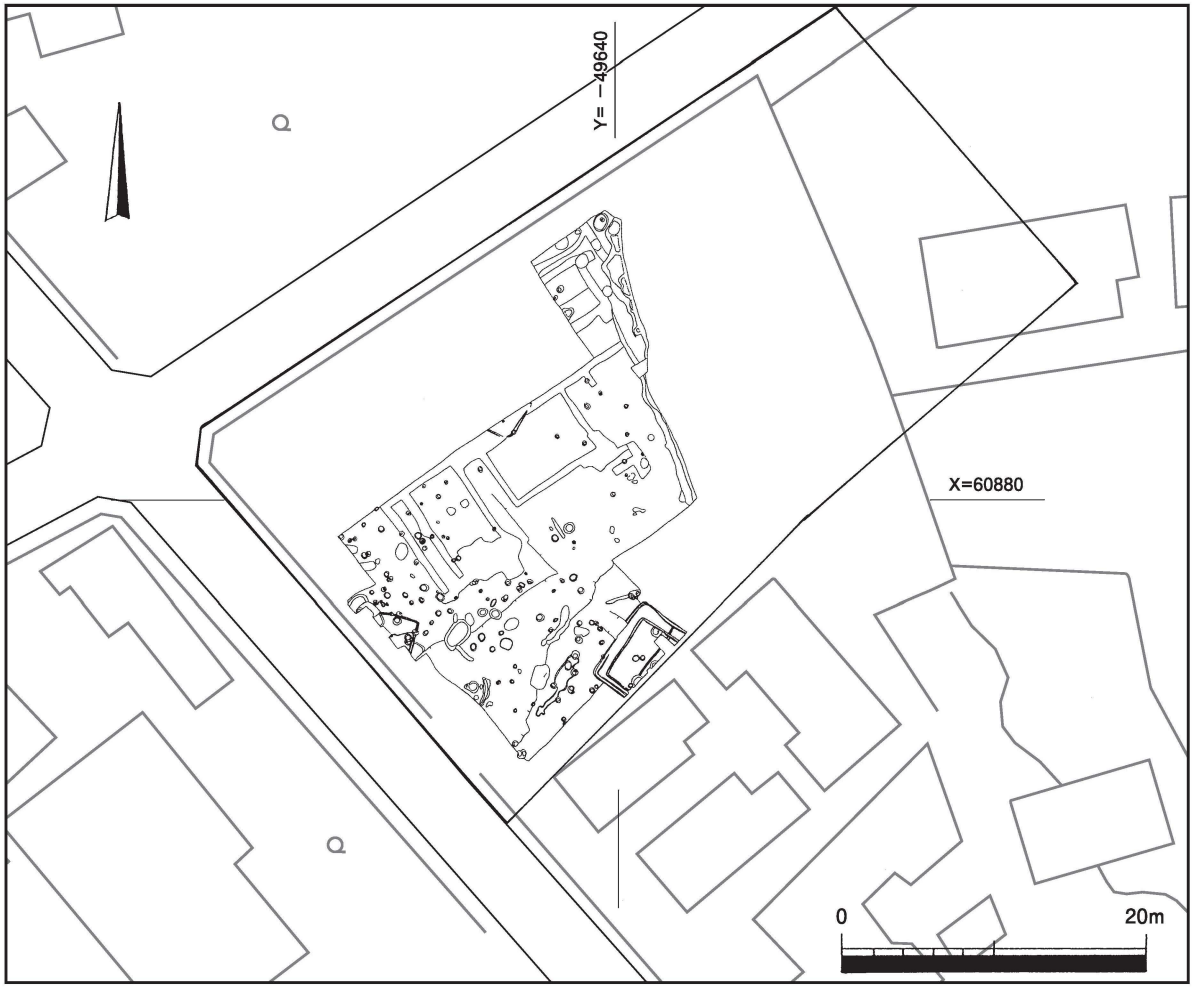


Fig.3　第16次調査区位置図(1/500)　太線は申請地の範囲

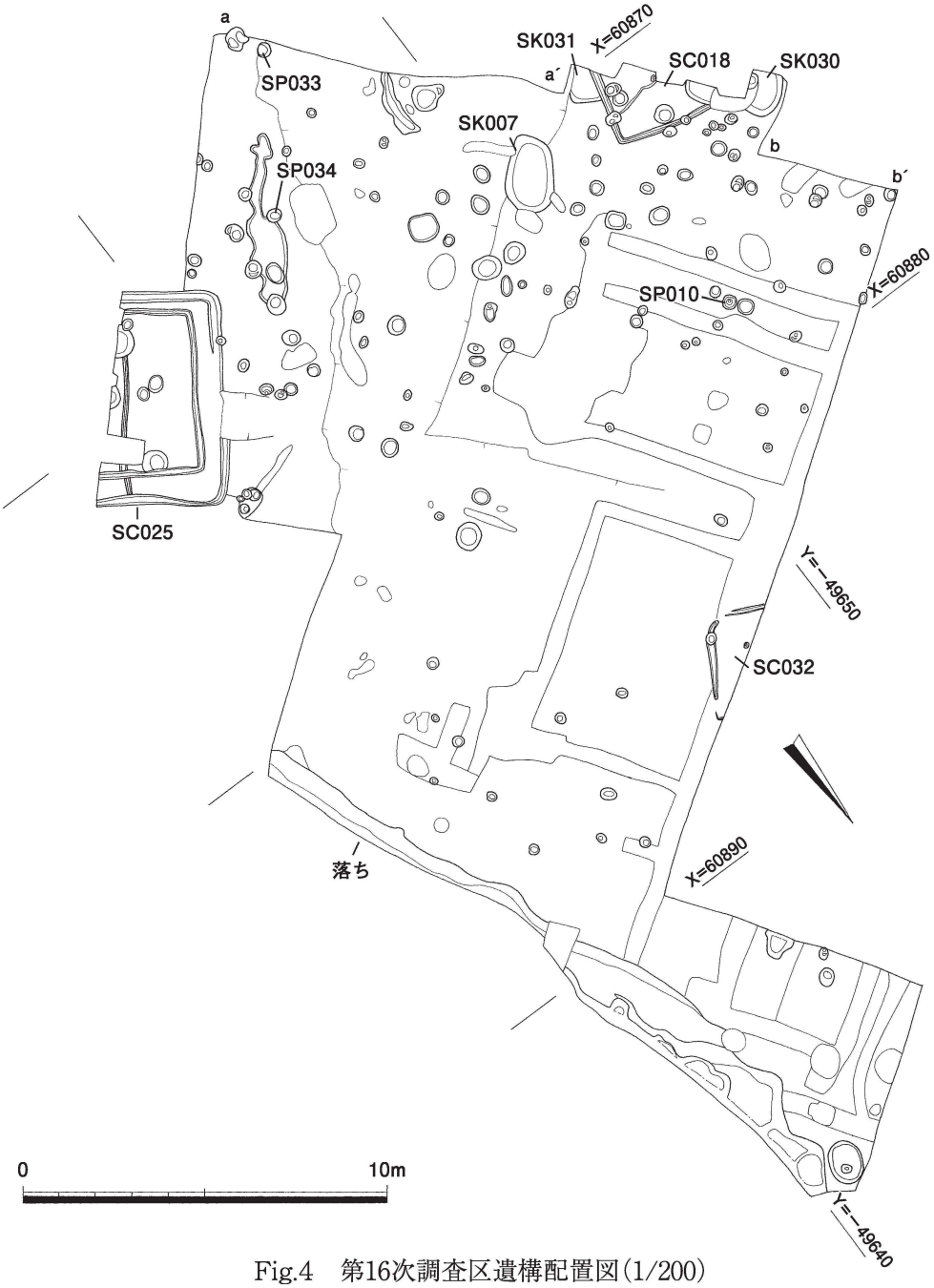


Fig.4　第16次調査区遺構配置図(1/200)

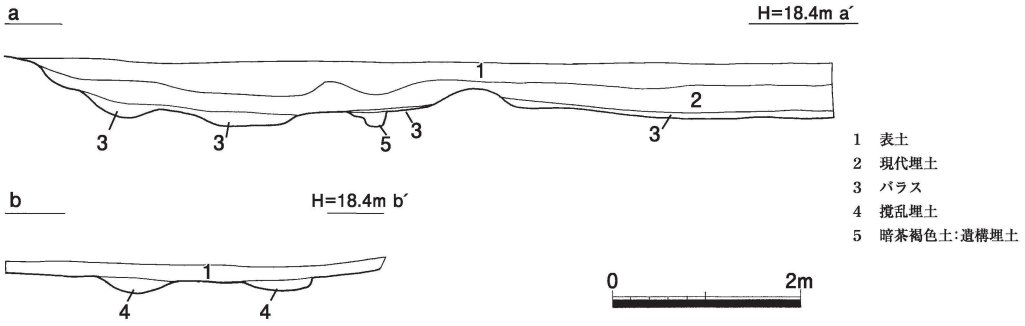


Fig.5　第16次調査区南西壁土層断面図(1/80)

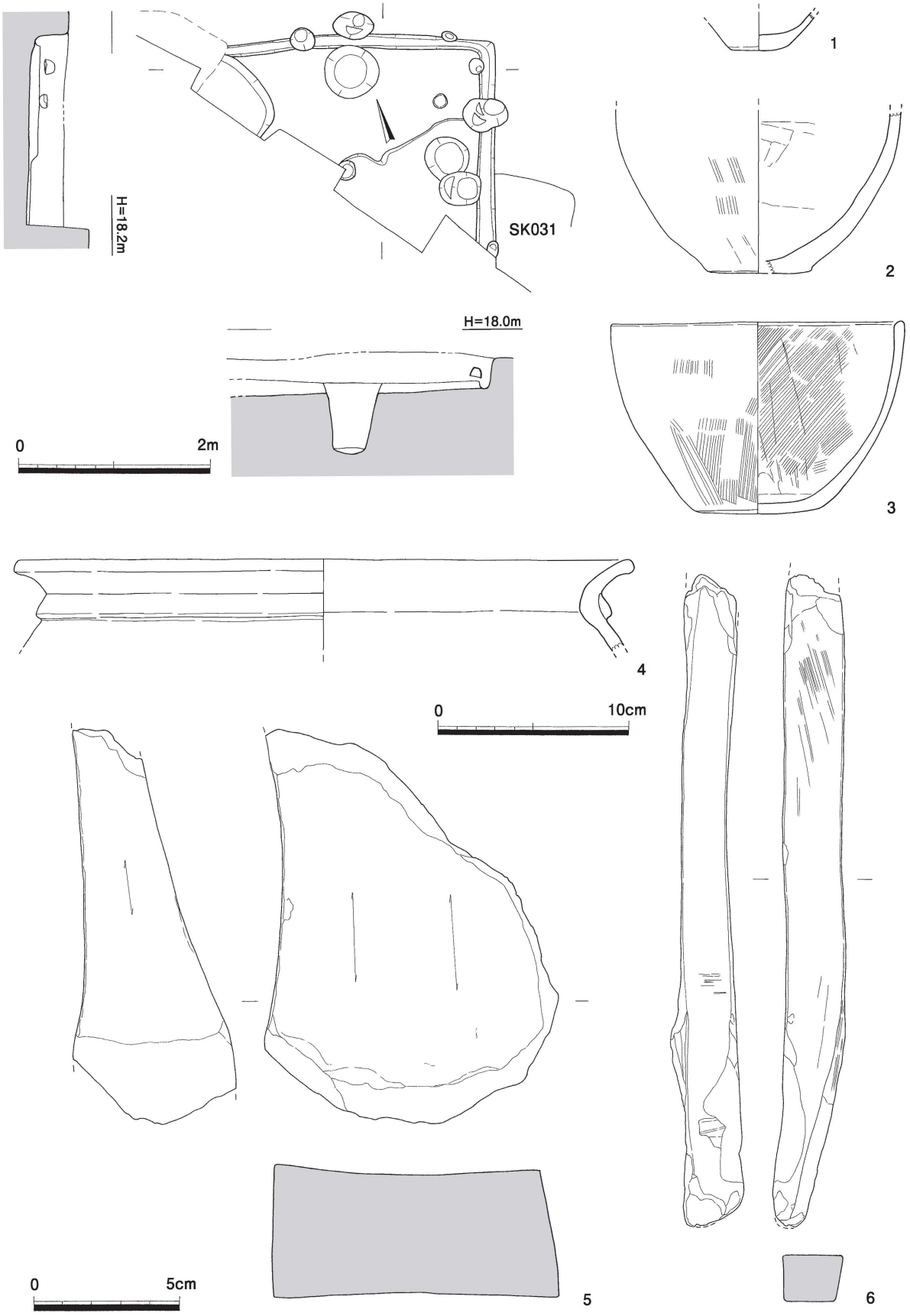


Fig.6　SC018実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3,5･6=1/2)

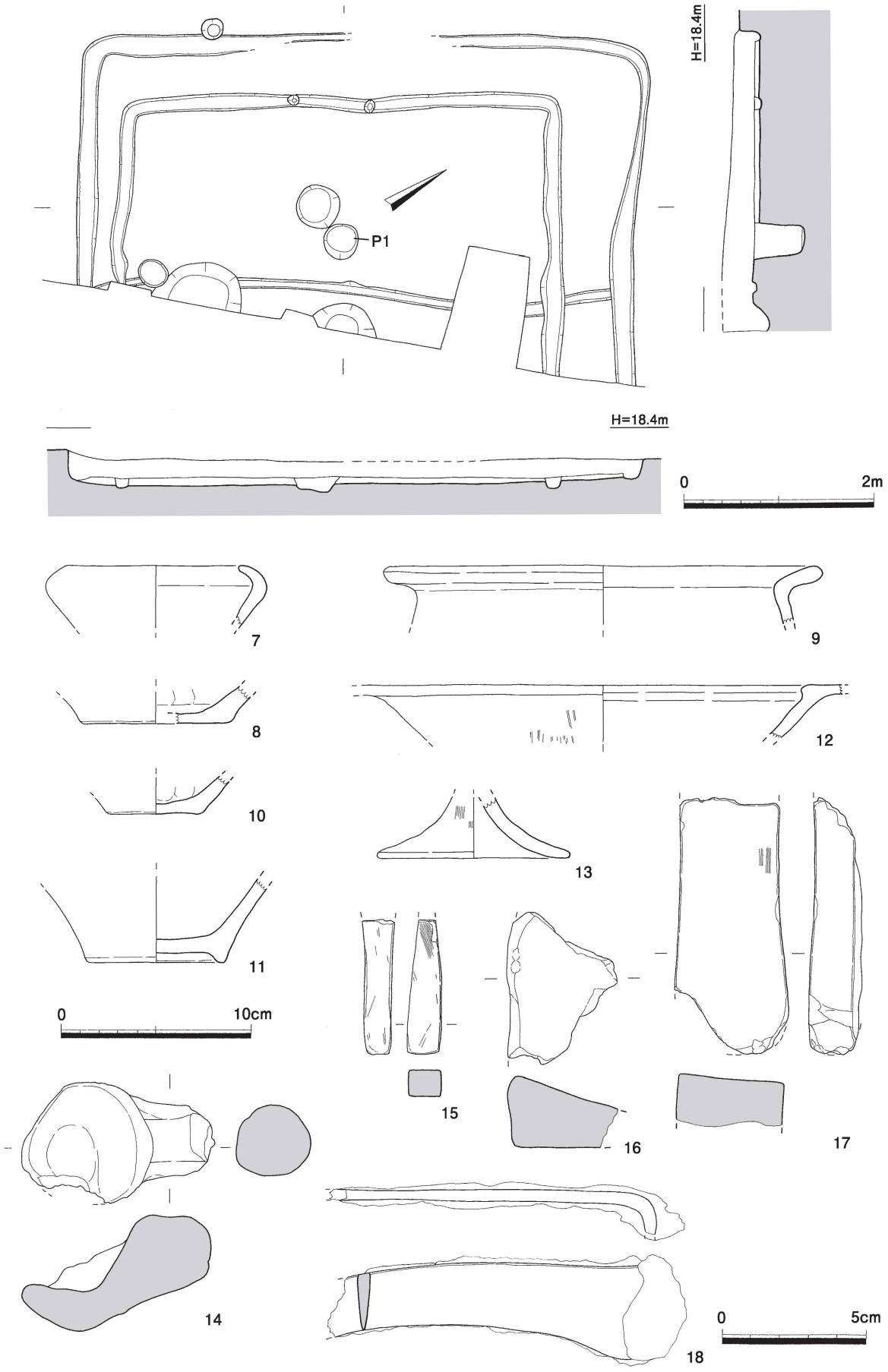


Fig.7　SC025実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3,15～18=1/2)

５・６は砥石である。５は花崗岩質で、残存長12.8cm、残存幅9.9cmを測る。欠損部を除き、ほぼ全面で研磨痕跡が認められる。表面中央は研磨によりわずかに凹んでおり、裏面の研磨痕跡は表面に比べてやや粗い。６は凝灰岩製で、残存長22.5cm、最大幅2.3cm、厚さ1.6～2.0cmを測る。欠損部分を除き、すべての面で研磨痕跡がみられ、細かな擦痕が多いが、表面と側面の一部には鋭利なものを研いだとみられる、細く、深い擦痕も数条認められる。

SC025（Fig.7・PL.1－（3））

調査区南東端で検出された竪穴住居跡である。西壁の一部は撹乱によって途切れる。南東側が調査区外へと続くため、全体の規模は不明であるが、方形の平面プランを呈し、南北長は約5.8m、東西長は少なくとも3.5m以上を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、壁高は約30cm残存していた。

検出できた壁際には幅約10～25cm、深さ約５cmの壁溝が巡る。さらにその内側に幅約12～20cm、深さ約５～10cmの溝が方形に巡っているのが確認された。住居の床面では黄褐色粘質土と黒色粘質土で形成した土を敷き詰めた貼床が確認されたが、内側の溝は貼床の下で検出されたものである。このような土の堆積状況から、住居の建て替えが行われた可能性が高く、内側で検出された溝は建て替えが行われる前の住居の壁溝と考えられる。内側の壁溝の長さから、建て替え前の住居の規模は南北長が約4.5m、東西長が少なくとも約2.9m以上と推定され、建て替えによって住居の規模を拡大したと想定される。また、住居の南東側では南北方向に幅５～12cm、深さ５cmの溝が検出された。溝の幅や深さから壁溝の可能性が考えられたが、住居内のいずれの壁溝にもつながらなかった。壁溝との切り合いからこの溝が古いことが確認できたため、SC025が建てられる前にもう1軒別の住居が存在していた可能性が考えられるが、SC025の北側と南東側が調査区外であるため想定の域を出ない。

SC025の中央で検出されたＰ１は直径約35cm、深さ約50cmを測る。住居の全体を把握できていないため不明確であるが、Ｐ１が主柱穴である可能性が考えられる。遺物は弥生土器片を中心にパンケース1.5箱分出土した。特筆すべき遺物としては鉄製鎌１点が挙げられ、住居の床面直上で検出された。出土遺物の年代から、弥生時代後期前半の住居と考えられる。

出土遺物（Fig.７・PL.２）

７～13は弥生土器である。７は袋状口縁壺の口縁で、口縁上端にわずかに丹塗りの痕跡がみられる。胎土には白色砂粒を少量含む。８は壺の底部で、器面には丹塗りの痕跡が認められる。内面にユビオサエ、外面にハケメとナデ調整がみられる。胎土は良質で、微細な白色砂粒を少量含む。９は甕の口縁部である。胎土はやや粗雑で、白色砂粒を多く含んでいる。内外面ともににぶい橙色を呈する。10は甕の底部で平底を呈する。内面にはユビオサエとナデ調整が認められる。胎土には白色砂粒を多く含む。11は甕の底部で上げ底を呈する。器面には丹塗りの痕跡がわずかに認められる。胎土には石英中砂粒と赤鉄鉱塊片、金雲母をわずかに含む。12・13は高坏である。12は内外面に丹塗りの痕跡が認められる。内面にナデ、外面にハケメ調整がみられる。胎土は緻密で、石英小砂粒を少量含む。13は胎土に石英小砂粒を多く含む。色調は外面が淡黄橙色、内面が灰白色を呈する。外面にハケメ、内面にナデ調整がみられる。14は土製杓子である。胎土はやや粗雑で、石英中砂粒を多く含む。色調はにぶい橙色を呈する。器壁は摩滅しており、調整は不明である。

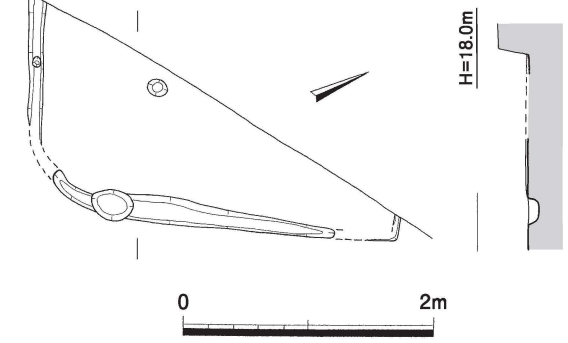


Fig.8　SC032実測図（1/60）

15～17は砥石である。15は粘板岩製で、欠損している上端を除き、すべての面で研磨痕跡がみられる。細かな擦痕が多いが、表面と側面の一部には鋭利なものを研いだとみられる、細く、やや深い擦痕も数条認められる。16は砂岩製で、表面には細かな擦痕がみられる。17は凝灰岩製で、上端と裏面は大きく欠損しているが、それ以外の表面と両側面では細かな擦痕がみられる。18は鉄製鎌である。住居の床面付近で出土した。直刃で、刃先は欠損している。残存長11.4cm、最大幅3.2cm、背幅0.4cmを測る。透過X線画像により基部はL字状を呈し、先端が欠損していることがわかった。

SC032（Fig.８・PL.１－（４））

調査区中央北端で検出された竪穴住居跡である。北西側が調査区外へと続くため、全体の規模は不明である。撹乱で大きく破壊されていたため、住居の壁は検出できなかったが、途切れながらも壁溝が方形に巡ること、また、ほかの住居跡と同様に黄褐色粘質土と黒色粘質土で形成された貼床がわずかに検出されたことから竪穴住居跡と判断した。壁溝の幅は約12～24cm、深さ約６cmを測る。壁溝の残存状態から住居の平面プランは方形を呈し、南北長約2.8m、東西長1.4m以上の規模と推定される。主柱穴は未検出である。なお、床面に一部焼土が認められる。遺物は弥生土器片が十数点出土したが、いずれも細片で図化し得なかった。住居の年代は不明確だが、ほかの住居跡と同時期の可能性がある。

（２）土坑（SK）

弥生時代後期後半の土坑を１基、古代末～中世前半の土坑を２基、計３基の土坑を検出した。

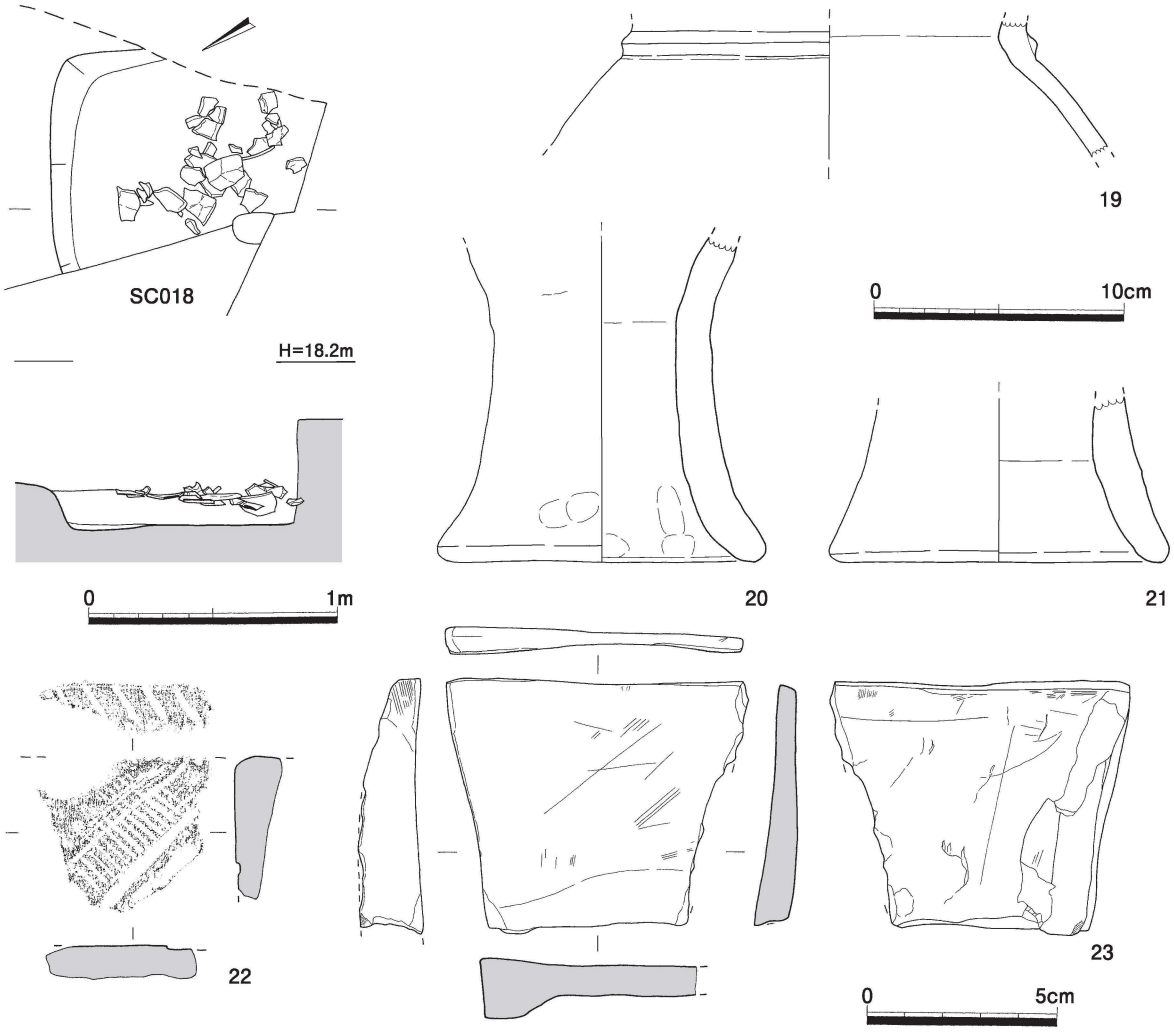


Fig.9　SK031実測図(1/30) および出土遺物実測図（1/3,23=1/2）

SK031（Fig.９・PL.１－（５））

調査区西端で検出された土坑である。東壁は攪乱、西壁はSC018に切られ、南側は調査区外へと続く。全体の規模は不明であるが、北東隅の形態から方形の平面プランと推定される。埋土の主体は黒褐色の粘質土である。深さは約15cmで、壁面は緩やかに立ち上げっている。底面は北側がやや下がるものの、ほぼ平坦である。検出上面で壺や器台などの土器片がまとまって出土しており、パンケース２箱分の遺物が出土した。出土遺物の年代から弥生時代後期後半の土坑と推定される。

出土遺物（Fig.９・PL.２）

19～21は弥生土器である。19は壺で、胎土に石英中粒を多く含み、器壁は灰白色を呈する。20・21は器台である。20は残存高12.9cm、復元底部径13.0cmを測る。胎土に石英中粒を少量含み、器壁は内外面ともに淡黄橙色を呈する。底部にユビオサエの痕跡が認められる。21は残存高6.5cm、底部径13.4cmを測る。胎土に石英中粒を多く含み、器壁は内外面ともにぶい橙色を呈する。

22・23は不明石製品である。22の石材は淡白色を呈し、軟質の凝灰岩質砂岩とみられる。欠損箇所が多く、表面と上側面のみが残存する。残存面には線刻による文様が施されている。表面では細く、浅い線刻が約0.1cm間隔で斜線状に数条施された後、幅が0.1cmに満たない細い線刻が緩やかなカーブを描くように施されている。同様のカーブを描く線刻は表面の下部にも刻まれている。この線刻は幅約0.2cm、深さ約0.1cmを測り、断面は台形状を呈する。表面でみられるほかの線刻に比べ

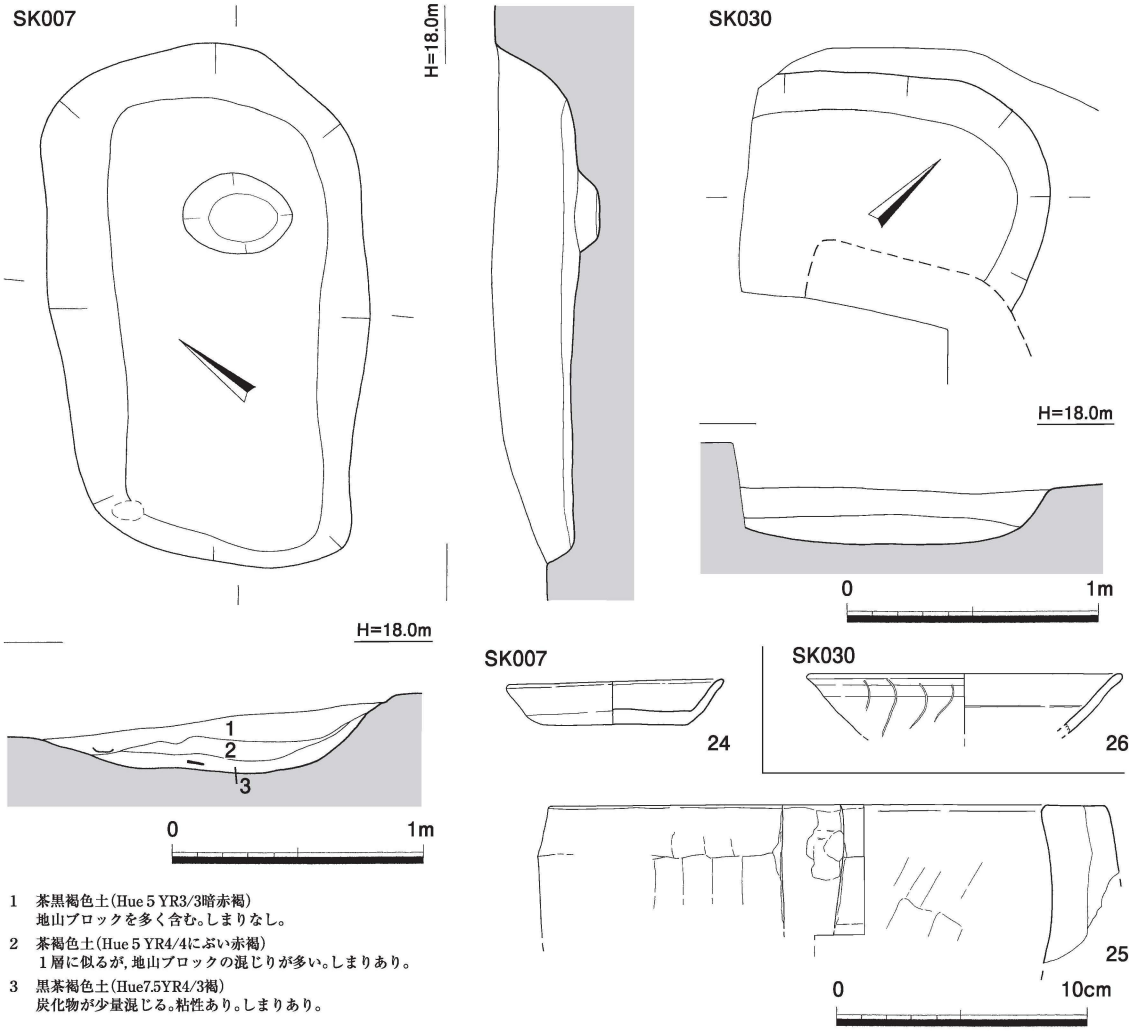


Fig.10　SK007･SK030実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)

て幅が広く、深い。上側面では約0.5cm間隔で斜線状の線刻が数条施されている。線刻の幅は約0.1cm、深さ約0.1cmを測り、断面はV字状を呈する。表面の線刻に比べて断面は鋭く、鋭利な金属器を用いて施された可能性が高い。23は凝灰岩製で、最大長6.7cm、最大幅7.9cm、厚さ0.3～1.6cmを測る。欠損箇所を除き、すべての面で研磨痕跡がみられ、表面は研磨により中央がわずかに凹んでいる。裏面は表面に比べて研磨が粗く、右端には幅約2.0cm、高さ約0.6cmの凸部がある。23の用途は不明であるが、研磨痕跡や裏面の凸部などから砥石として利用した後、再加工を試みた可能性が考えられる。

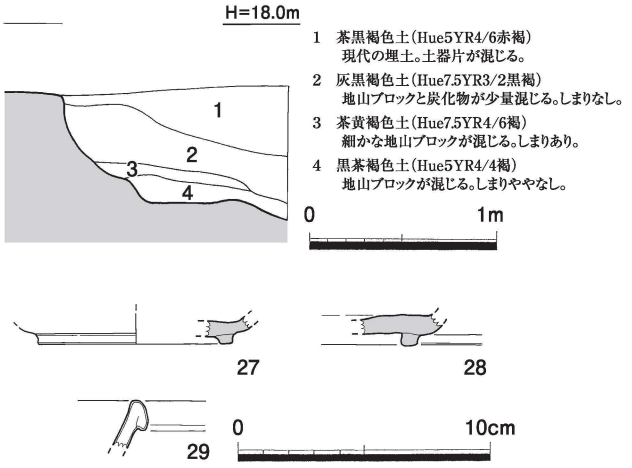


Fig.11　落ち土層断面図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SK007（Fig.10）

調査区西側で検出した土坑である。平面プランは隅丸の長方形を呈し、長軸約2.0m、短軸約1.2mを測る。深さは約30cmで、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、東側では浅いピットが検出された。埋土の主体は地山のブロック土を多く含んだ茶褐色粘質土であるが、底面付近には炭化物を少量含んだ黒茶褐色の粘質土が５cmほど堆積していた。出土遺物は少量で、遺物の年代から13世紀後半～14世紀前半の土坑と考えられる。

出土遺物（Fig.10・PL.２）

24は白磁の皿である。口径8.5cm、器高1.8cmを測る。口縁端部は口禿げである。胎土は灰白色、釉は灰白色を呈する。底部は平底で、底部外面の釉は板状の工具でのばしている。25は滑石製の石鍋である。復元口径は約21.0cmを測り、口縁部には縦長の把手がつく。内外面ともに平ノミによるケズリ調整の痕跡がみられる。外面には煤が付着している。

SK030（Fig.10）

調査区西端で検出された土坑である。南東側は攪乱によって削平され、南西側は調査区外へと続いている。全体の規模は不明であるが、少なくとも長軸1.2m以上、短軸0.9m以上を測る。平面プランは楕円形を呈する可能性が高い。深さは約20cmで、壁は緩やかに立ち上げる。底面はほぼ平坦である。土器片が数点出土し、遺物の年代から11世紀後半～12世紀前半の土坑と考えられる。

出土遺物（Fig.10）

26は白磁椀の口縁部である。復元口径は約12.4cmを測り、口縁端部はやや外反する。胎土は灰白色で、釉はやや灰色を呈する。外面に縦櫛目文が施されている。

（３）落ち

調査区東端で検出された。調査区内で確認できた深さは約0.6～0.7mを測る。底面は東側に向かって傾斜しており、調査前に行った試掘結果では約1.1mの深さがあることが確認されている。上層には近現代のゴミなどが含まれ、中層から下層では地山のブロック土を含んだ粘質土が堆積していた。弥生土器片や白磁椀片、染付陶磁器片など様々な時代の遺物が出土した。調査区内では古代の遺構は検出されていないが、古代の須恵器片なども含まれていた。

出土遺物（Fig.11）

27・28は須恵器の高台付坏である。27の復元底径は7.8cmを測る。29は白磁椀の口縁部で、口縁端部は玉縁である。胎土は灰白色、釉は灰色を帯びた白色を呈する。

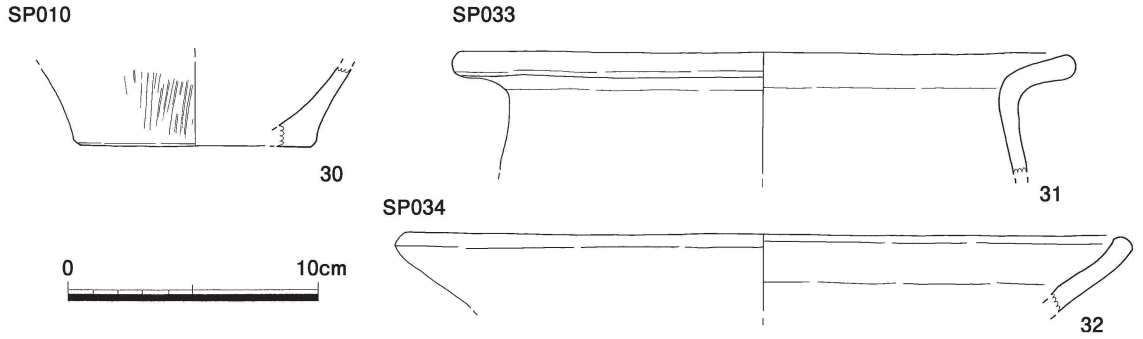


Fig.12　SP出土遺物実測図(1/3)

（4）ピット（SP）

調査区内において多数のピットを検出したが、掘立柱建物としてまとまるものはなかった。ピットの出土遺物は少量かつ小片がほとんどであったが、以下ではピットから出土した遺物のうち、比較的残存状態の良いものを挙げる。

出土遺物（Fig.12）

30～32は弥生土器の甕である。30はSP010で出土した平底の底部片で、外面にはハケメの痕跡がみられる。31はSP033で出土した口縁部で、復元口径は24.6cmを測る。32はSP034で出土した口縁部で内外面ともににぶい橙色を呈する。

Ⅳ．おわりに

麦野C遺跡では奈良時代に大きな集落域が展開する。第５次調査地では弥生時代前期末の住居跡や小児甕棺、弥生時代中期末～後期初頭にかけての方形住居群、12世紀後半～13世紀前半の溝や土壙墓、第15次調査地では12世紀前半の井戸や土坑などが検出されているが、奈良時代以外の時期の遺構は少ない。麦野C遺跡の調査事例が少ないことも要因の一つではあるが、古代～中世にかけての削平や昭和の地下げによる遺構の消失が大きな要因であろう。

本調査地は地下げされた周辺に比べて１ｍ以上高く残存しており、遺構密度は低いものの、弥生時代後期後半の土坑と弥生時代後期～終末の竪穴住居跡、11世紀後半～12世紀前半と13世紀後半～14世紀前半の土坑を検出することができた。弥生時代後期後半の土坑や弥生時代後期～終末の竪穴住居跡は第５次調査地で確認された弥生時代中期末～後期初頭にかけての方形住居群に続く時期のものであり、少なくともその時期まで連続して集落が営まれていた状況がうかがえる。SC025では住居の建て替えが行われた可能性が高く、住居の規模を拡大したと考えられる。また、床面付近では鉄製鎌が１点出土した。弥生時代の特筆すべき遺物として、SK031から出土した不明石製品（Fig9,No.22・PL.２）が挙げられる。福岡市博多区の席田大谷遺跡第４次調査で出土した銅戈鋳型模造品（註１）と同じ軟質の凝灰岩質砂岩製とみられ、線刻によって文様が施されている点においても鋳型模造品と類似する。しかし、SK031出土石製品は小片のため何を表現した文様か判断ができず、文様の施工箇所も模造品とは異なっていることから、鋳型模造品と判断できなかった。今後の出土事例の増加を待って再度検討する必要がある。

調査区の西側では11世紀後半～12世紀前半の土坑が１基と13世紀後半～14世紀前半の土坑が１基検出された。第５次・第15次調査での調査成果と合わせると、検出遺構は少ないものの、11世紀後半～14世紀前半にかけても集落が展開していたことがうかがえる。

註１：加藤良彦編　1994『席田遺跡群７』福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集　福岡市教育委員会【Fig.62, No.64】

（1）調査区全景（東から）

（2）SC018（南西から）

（3）SC025（北から）

（4）SC032（東から）

（5）SK031（北から）

出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふ り が な	むぎのＣいせき９
書　　名	麦野Ｃ遺跡９
副 書 名	― 麦野Ｃ遺跡第16次調査の報告 ―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1376集
編著者名	松﨑 友理
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092-711-4667
発行年月日	2019年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
むぎの C いせき 麦野Ｃ遺跡 第16次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくむぎの 6ちょうめ14－1 博多区麦野6丁目14−1	40132	0050	33° 32′ 52″	130° 27′ 55″	20160920 ～ 20161102	361	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麦野C遺跡第16次	集落	弥生時代･古代末～中世	竪穴住居跡、土坑	弥生土器、白磁、砥石	鉄製鎌、不明石製品

要　約	第16次調査では竪穴住居跡３軒、土坑３基、ピットなどを検出した。周辺の土地よりも標高が１ｍほど高く残存しており、残存状態の良い遺構が多かった。出土遺物はパンケース約４箱分である。竪穴住居跡はいずれも方形のプランを呈する。調査区南東端の住居跡では、壁溝が２条検出され、土の堆積状況から建て替えを行い、規模を拡張したことが確認された。床面では鉄製鎌が１点出土した。調査区西端の住居跡では北側で 10cm ほど高く貼床が検出され、ベッドの可能性が考えられる。この住居跡に切られる土坑では弥生時代後期後半の器台や甕がまとまって出土した。また、白磁をともなう古代末～中世前半の土坑も２基検出した。

むぎの
麦野Ｃ遺跡９

― 麦野Ｃ遺跡第16次調査の報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1376集

2019年３月25日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目８番１号
(092) 711－4667

印刷　有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目８番７号
(092) 592－3381